

論文内容の要旨

研究科名	人間社会学研究科	専攻名	地域マネジメント専攻			
学籍番号	1411D02	氏名	覃 建恩			
論文題目	<p style="text-align: center;">エスニック・ツーリズムと社会変容に関する研究</p> <p style="text-align: center;">ー中国南西部広西チワン族自治区の少数民族を事例としてー</p>					
要 旨						
<p>1. 研究の背景</p> <p>中国では 1978 年から改革開放路線への転換以降「西部大開発」の政策を打ち出し、内陸部の経済発展と現代化を目指すなかで、少数民族地域の観光開発に大きな期待が寄せられている。そして、1980 年代初頭からエスニック・ツーリズムが中国全域に波及していく中で、特に雲南省がエスニック・ツーリズムの先頭を切り、少数民族の居住地には巨大な経済波及効果をもたらされた。そして、雲南省と隣接する広西チワン族自治区でも、チワン族やヤオ族などの少数民族の特色ある伝統文化や特殊な生活様式などを観光資源として活用し、エスニック・ツーリズムの振興に取り組むようになった。</p> <p>このような伝統文化の活用によるエスニック・ツーリズムの振興は、大きな経済効果と貧困からの脱出という目的の下で、少数民族の社会発展のために企画されたのである。しかし、こうしたエスニック・ツーリズムは、少数民族の生活を改善することに寄与する一方で、文化の「商品化」という問題や伝統文化の保存という課題をも生み出した。すなわち、近代化の影響のみならず、観光開発によって流入する外来文化と伝統文化の両立という問題が生じ、少数民族は民族的アイデンティティ喪失の危機に立たされているのである。</p> <p>2. 研究の目的</p> <p>本論文では、西南中国広西チワン族自治区河池市の少数民族におけるエスニック・ツーリズムを研究事例として、それが民族社会をどのように変容させているかを明らかにすることを目的とする。</p> <p>3. 研究の方法</p> <p>本論文の目的を達成するために、まず先行研究によってエスニック・ツーリズム発展の背景を概観し、発展過程で生み出される問題点を把握する。また、歴史文化と民族誌に関する文献資料を分析し、研究対象地域における少数民族社会の伝統文化の歴史的経緯を明らかにする。こうした理論的研究と同時に、エスニック観光地としての河池市の現状について調査を実施し、同地の少数民族の社会発展動態を明らかにするとともに、アンケート調査の結果の分析により、エスニック・ツーリズムが少数民族の意識をどのように変化させているかを把握する。さらに、地元住民の生活の変化について聞き取り調査を行い、エスニック・ツーリズムに対する彼らの態度および評価を考察する。</p> <p>具体的なフィールドワークの内容は以下の通りである。まず、2014 年 8 月 20 日から 9 月 10 日までの間に河池市の少数民族居住地域で第一次の現地調査を行い、主に少数民族における銅鼓文化の歴史的変遷と観光活用の実態について調べた上で、エスニック・ツーリズムにおける</p>						

少数民族の文化や祭りの観光活用の現状を考察した。また、2015 年 5 月 21 日から 6 月 10 日までの間に第二次、同年 7 月 13 日から 23 日までの間に第三次の現地調査を実施し、主にエスニック・ツーリズムにおける伝統的祭りの「観光資源化」と「擬似イベント化」という問題点について考察した。さらに、2016 年 2 月 3 日から 3 月 3 日及び 8 月 8 日から 23 日までの間に第四・五次の現地調査を実施し、ヤオ族の伝統的に維持されてきた祭りの実態を調べ、ヤオ族文化の代表的な研究者である蒙霊にインタビューを行うとともに、観光開発における伝統的祭りのあり方を実際に調査した上で、「夢・巴馬」という山水と少数民族文化を舞台にした光のショーについても考察した。そして、2017 年 4 月 28 日から 5 月 21 日までの間に第六次の現地調査を実施し、主にヤオ族の伝統的な祭りである祝著節が何百年間にわたって本来行われてきた場所の実態を調べ、村人に対する聞き取り調査から祝著節の現状を明らかにした。

4. 研究の結果

本論文は序論と 2 部から構成されている。まず序論では、本研究の背景と問題点、先行研究と論文の目的および方法、理論の考察、論文の構成について記述する。

第Ⅰ部は中国の少数民族の人口の推移とその分布地域を報告するとともに、本論文の研究対象であるチワン族とヤオ族に関する先行研究を、主として年中行事や建築様式などの面から取り上げた。また、西部大開発の構想と実施及びその経済効果を取り上げ、その実施がエスニック・ツーリズムに与えた影響について分析した。さらに、西南中国におけるエスニック・ツーリズムの展開を理解するために、雲南省、貴州省、広西チワン族自治区の三つの地区のエスニック・ツーリズムの発展動向を把握した。最後に、広西チワン族自治区河池市のさまざまな自然観光資源と少数民族の文化観光資源を取り上げ、西部大開発によって河池市の観光業が推進されていく中で、少数民族の伝統文化が活用されてきたことを検討した。西部大開発によって河池市のインフラの建設が促進されるとともに、観光業も発展するようになった。また、少数民族の伝統文化が観光活用されることによって、その成果が地域社会に活かされ、少数民族の人々の生活改善に貢献した。さらに、観光開発における市場経済の浸透とともに、少数民族の伝統的な文化を核とする観光開発パターンがよく見られるようになっていった。しかし、少数民族文化を活用した観光による経済発展は、その背後にある伝統の喪失や環境の破壊などといった問題を生じさせている。

第Ⅱ部では、第Ⅰ部で提示した問題を踏まえ、近代化が少数民族の社会に及ぼす影響にも留意しつつ、観光開発が民族社会の変化に及ぼす影響がどのようなものかを明らかにし、エスニック・ツーリズムと民族社会文化の保存との間の関係について、地域マネジメントの観点から検討した。その結果は、以下の通りである。

まず、中国広西チワン族自治区河池市の布努ヤオ族の祝著節を事例として取り上げ、エスニック・ツーリズムの影響下でその祭りがイベントへと変質しつつあることを考察した。政府からバックアップされた祝著節として観光資源化されることによって、大規模なイベントへと変質すると同時に、多くの観光客を誘致した。伝統的な民族文化が商品化されることによって、その本来の意味は希薄になってきているのである。さらに、銅鼓の装飾化や、舞台の後方に新旧の銅鼓が無秩序に並べられている現状は、銅鼓の宗教的意味が喪失されていることを象徴的に示している。

次に、布努ヤオ族の銅鼓文化が観光政策の目玉として扱われることにより大きく変容していくことが、民族アイデンティティとどのように関わっているかを、イベント参加者に対するアンケート調査の分析結果により考察した。その結果、布努ヤオ族の人たちはもはやほとんど銅

鼓を所有しておらず、日常生活の中で銅鼓を叩く習慣がないにも関わらず、なおも銅鼓を伝統的で重要な文化財として認識していることが分かった。さらに、観光客向けのショーとして伝統的な民族文化が商品化されることによって、この習慣と意識に変化が生じており、銅鼓の本来の意味は希薄になってきていることも明らかにした。他方で、元々ヤオ族の意図とは無関係に「達努節」、「二九節」などと呼ばれていた祭りを、ヤオ族の研究者の提言を契機として、ヤオ族自身が祭りの意義を自民族にとって重要な宗教的意味として再認識し、祝著節と呼ぶようになった事態は、そうした民族アイデンティティの確立を示している。しかし、そのように再認識され、祝著節と呼ばれるようになった祭りが今や、銅鼓文化の観光化によって他の民族と頻繁に接触することで、本来の意味を喪失し、民族アイデンティティにも変化が見られるようになったのである。イベント化された祝著節は、生活が現代的になって、銅鼓を叩く習慣が急速に失われつつある布努ヤオ族の人々にとっては、銅鼓文化を保存するための有益な方法として認識されている。しかし、このようにイベント化され、宗教的コンテクストから切り離された銅鼓文化は、祭りというよりも、むしろ伝統芸能として保存されているに過ぎないとも考えられる。

また、布努ヤオ族の銅鼓文化そのものを主題として取り上げ、チワン族の銅鼓文化と比較検討しながら、祭りの観光活用のあり方について考察した。その結果、以下の点を明らかにすることができた。

第一に、布努ヤオ族とチワン族の銅鼓文化を比較検討し、優れた民芸品であるとともに、宗教的な呪物でもある銅鼓の特色を概観した。そして経済発展と現代文明の進展が、銅鼓文化にこれまでにない大きな影響を与え、銅鼓の使用頻度が減少し、演奏できる人も少なくなってきたことを指摘した。その上で多くの若者は出稼ぎに行って、銅鼓を打つ機会がない上に、現代的な娯楽に惹かれ、銅鼓には無関心となっていることを述べた。

第二に、銅鼓文化が観光活用され、多くの観光者を惹きつけて、大きな経済効果をもたらしていることを、河池市銅鼓山歌芸術節、布努ヤオ族祝著節とチワン族蚂拐（カエル）節などの祭りを事例として検討した。それによって少数民族の日常生活世界に埋め込まれてきた銅鼓習俗が、広西チワン族自治区河池市政府の文化政策と市場経済の少数民族居住地域への浸透という外的要因によって規定され、変化しつつあることを明らかにした。また、中国西南部における未開発地の少数民族のホスト側と、経済的に優越した地位にある漢民族のゲスト側とがその文化的価値の相違や経済的な格差などによって、両者のコンタクトゾーンで絶えず摩擦を生じさせていることを指摘した。そして国家の優遇政策によってチワン族と布努ヤオ族の銅鼓文化が観光資源化されることで、日常生活から切り取られてエンターテインメント化し、観光者の目の前にさらされ、銅鼓文化の本来の意味は希薄になりつつあることを指摘した上で、観光化と同時に祭りの本来的意義を考慮する必要があることを述べた。

さらに、白褲ヤオ族の伝統文化の観光化を取り上げ、その中で伝統文化の観光資源化についてどのような問題点があるかを考察した。白褲ヤオ族の民族文化の観光化は 2000 年から始まり、現在まで 16 年が経過して、さまざまな効果をもたらしているが、観光地としてはまだ発展期にあると考えられる。この時期は、政府によって観光開発が白褲ヤオ族の社会にもたらす経済的利益が強調され、同時に政府自身が観光開発における起業家としての役割を果たす場合が多かった。また、観光企業の導入によって、企業化された管理を行うことが、地域社会を振興するうえで顕著な効果を有するものであることも明らかとなった。その一方で、地域の自然環境や社会文化環境に対するインパクトについての関心は不足していることがわかった。さらに、観光開発の直接的な効果として経済利益を得ることができるようになったことで、村民たちの

観光化への志向性は強くなっているように思われる。現代化と観光開発によって白褲ヤオ族の生業形態は、2000 年代より前の農業中心のあり方からサービス産業中心のあり方へと転換し、社会経済の構成は急激に変化しつつある。この地域では、伝統文化の保存のために積極的な方策が図られると同時に、観光開発において伝統文化の観光資源化が推進されている。そして、市場経済の浸透と「観光脱贫」政策の下で、地元住民には経済意識が芽生え、利益を得るために伝統文化を商品として売るという事態が生じている。

最後に、少数民族居住地域への観光客の流入によって、布努ヤオ族の伝統文化がどのように変容したかを明らかにした。具体的には、観光化される前の布努ヤオ族の服飾におけるデザイン、耐久性、生産体制、着用の有無、季節性、色の組み合わせ、装飾の図案と精神的象徴などを、観光化された後と比較した。その結果、布努ヤオ族の服装は現代的ファッションの浸透に伴い、製作方法が変化したことが確認された。また、既製服が流行し、様式の過美化が進行するなかで、意味の希薄化が進んでいることを確認した。そして、観光開発が布努ヤオ族の建築文化に与えた影響についても分析した。具体的には、政府主導下で「伝統的な茅葺き建築の方案」が実施され、布努ヤオ族の伝統的な建物が改築されていった。また、交通網の整備は、観光客の流入によって、道路沿いの村における伝統民族文化の崩壊や変容を加速させた。さらに、観光開発による伝統的祭りの商品化が進み、祭りの意義が失われつつあることを指摘した。

また、近代化の推進によって、市場経済が浸透しつつあり、布努ヤオ族の社会文明化が促進され、布努ヤオ族の伝統文化の崩壊が進んでいることも事実である。そして観光開発と生活の近代化が少数民族の伝統文化に与え影響を踏まえ、観光開発と生活の近代化との間にどのような関係があるのかを検討した。その結果、近代化は農村部の人々にとって決して悪いものではないと思われるが、その一方で、代々伝承されてきた民間伝承、歌、芸能の断片化、担い手不足による伝統行事の簡略化、伝統工芸や民間医療の後継者難、民族建築物の減少、伝統的な儀礼や習俗の衰退などといった問題が深刻なものとなってきたことを明らかにした。これらの点における近代化の影響力を無視することはできないが、もう一つ新たな要因として出現したのが観光開発の影響なのである。観光開発は、多くの観光客を誘致することで、その成果を経済に活かすことによって、少数民族の生活を改善し、地域社会の近代化をも促進している。近代化によって若年層が出稼ぎに行くという現象が顕著化することに伴って、農村部の人口が減少するとともに、担い手不足による伝統行事の簡略化などの問題がひき起こされている。その一方で、観光開発の進展によって、農村地域社会での雇用機会が増加したため、若者たちが故郷に回帰する現象もしばしば見られるようになっている。観光開発の推進は、地域社会の過疎化の問題を緩和し、伝統芸能の担い手を増加させることで、伝統文化の保護にとって有効な手段であるとも考えられる。しかし、観光の推進によって、舞台化された伝統行事における「文化の真正性」という問題が生み出されるだけでなく、伝統文化の商品化の問題も深刻になってきたのである。

以上のような結果を踏まえ、エスニック・ツーリズムとまちづくりをどのように調和させていくことができるのかという問題を、観光まちづくりにおける地域社会、地域環境、地域経済の三つをめぐる地域マネジメントの視点から検討した。エスニック・ツーリズムの進展によって、広西チワン族自治区の少数民族の村々では伝統的家屋が整備されて、新たな土産物屋や飲食店などの観光施設に転用され、多くの観光客を誘致することによって、確かに経済的利益を生み出した。しかし、観光という手段で得られた収益の一部が地域環境の保全に投入されているものの、地域環境の保全に対する関心が不足している現象がよく見られる。また、エスニック・ツーリズムの進展によって、少数民族の一部の人々には伝統文化が重要な民族文化財とし

て認識されたが、その一方で地域での伝統行事や習俗など、生活のなかで大事にされている資源を地域外の人々に伝え、価値を共有しようとする意識は教育などの制約によってまだ希薄であると思われる。西南中国広西チワン族自治区ではエスニック・ツーリズムの推進によって、地域振興が活発になっているが、観光開発によってもたらされた負のインパクトについては十分に認識されていない。また、観光で得られた収益を地域環境の保全にさらに投入する必要があると思われる。そして、最も重要なことは、特にこれまで政府と企業が主導してきた地域において伝統行事や習俗など生活のなかで大事にされている資源を地域外の人々に伝える活動に、地域住民が主体的に参入していくことであると思われる。